

会員の広場



「ピース」という名のバラ

津下 孝正（東京）

今年が第一回の国連総会が開催されてからちょうど70年目の記念の年になるという。実はこのことを私は毎年の年初めに楽しみにしているNHKの生中継、ウィーンフィルのニューイヤークンサートを視聴して知った。今年には老練な芸術家マリスヤンソンスの指揮

で執り行われた。

冒頭の曲目は現代のヨハンシュトラウスと云われているロベルトシュトルツの「国連行進曲」であった。旧ソ連領エストニア出身のマリスヤンソンスの強い推奨であったという。貴賓席に座った潘基文国連事務総長がスポツトライトを浴びそのメインバルコニーには例年にも増してこぼれ落ちんばかりのウィーンバラが彩りを添えていた。

実は国連創立と「このバラ」とは深い因縁があり逸話として世界のバラ愛好家の間で広く語り継がれている。元々「このバラ」はフランスのリオンの育種家フランシスメイアンによって作り出され当初母親の名前を冠して「マダムアントワヌメイアン」と名付け

られた。クリーム色に濃淡のピンク色を帯び上品な芳香がただよい大輪で見るとにふくよかなバラで20世紀最高の名花と称賛されフランスの誇りであった。

ところが、第二次世界大戦の末期、破竹の勢いのナチスドイツ軍がフランスレジスタンスの拠点であったリオンに迫り陥落必至となった時、リオン駐在の米国総領事の機転でこのバラの種株がアメリカ本国に一時疎開されることになった。まさに米国行き最終便であったという。大戦終結の秋、米国サンフランシスコにおいて国連憲章制定の国際会議が開催され世界の50カ国が参集したという。この時、地元サンフランシスコのバラ会の発案でこの気品のある麗しいバラが「ピース」と

名称を改められ「平和」の象徴として参加各国の代表団それぞれの宿舎に届けられたのである。

このエピソードが大戦による荒廃で世界平和を渴望していた全世界の人々の感動を呼び「ピース」と名付けられたバラは地球規模で愛されかつ栽培されその数は一億本にも及んだと云われている。

また、日本にあっても戦後間もない時期、復活した「日本バラ会」の会長に就任されたバラ愛好家、石橋湛山氏もこの「ピース」というバラのたどった運命に自らの「東洋の平和」を信条とした生涯に渡る言論、政治家としての活動を重ね合わせ感慨ひとしおであったに違いない。